

愛野向山 A－2・3・4 号墳

—昭和61年度緊急発掘調査概報—

1 9 8 7

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、袋井市教育委員会が国庫補助金・県費補助金を得て行った昭和61年度袋井市愛野向山A—2・3・4号墳緊急発掘調査の概報である。本年度調査区内に、当初古墳は2基所在すると考えられてきたが、調査の結果3基であることが判明したので、愛野向山A—2・3・4号墳として報告する。
2. 調査は吉岡伸夫（袋井市教育委員会社会教育課）が発掘担当者となり、静岡県教育委員会文化課の指導を得て行われた。
3. 出土遺物の整理、挿図の作成は、主に早川保子、寺田矩江が担当した。石器・金属製品の実測は松井一明（袋井市教育委員会社会教育課）による。写真図版は吉岡・早川・寺田が撮影した。なお挿図中の通し番号と図版中の番号は同一である。
4. 本書の執筆・編集は吉岡が行った。
5. 発掘調査資料は、すべて袋井市教育委員会が保管している。
6. 発掘調査に関する事務は、袋井市教育委員会文化振興係が担当した。

目 次

1 調査にいたる経過	1
2 発掘調査の方法・経過・調査整理体制	2
3 立 地	5
4 愛野向山A—2号墳	6
5 愛野向山A—3号墳	7
6 愛野向山A—4号墳	8
7 その他の遺構と遺物	12
8 まとめにかえて	13

插图目次

第1图	愛野向山A—2・3・4号墳位置図……………	1
第2图	愛野向山A古墳群・周辺遺跡分布図……………	2
第3图	愛野向山A—2・3・4号墳地形図（墳丘図）……………	3
第4图	愛野向山A—2号墳実測図……………	6
第5图	愛野向山A—3号墳実測図……………	7
第6图	愛野向山A—4号墳実測図……………	9
第7图	愛野向山A—2・3・4号墳主体部・土壙状遺構実測図……………	10
第8图	愛野向山A—2・3・4号墳出土土器実測図・拓影……………	11
第9图	剥片・金属製品実測図……………	12
第10图	愛野向山A—4号墳出土弥生土器拓影・実測図……………	12

表目次

第1表	愛野向山A—2・3・4号墳一覧表……………	13
-----	-----------------------	----

図版目次

図版1	愛野向山A—2・3・4号墳遠景
図版2	愛野向山A—4号墳発掘調査前近景 愛野向山A—2・3号墳近景
図版3	愛野向山A—2号墳完掘全景 愛野向山A—3号墳完掘全景
図版4	愛野向山A—4号墳完掘全景 愛野向山A—4号墳東側周溝
図版5	愛野向山A—2号墳主体部 愛野向山A—3号墳南側主体部 愛野向山A—4号墳周溝内土壙状遺構 愛野向山A—3号墳北側主体部 愛野向山A—4号墳主体部 愛野向山A—3号墳焼土 愛野向山A—4号墳主体部—完掘状態—
図版6	愛野向山A—4号墳土器出土状態 発掘調査風景
図版7	愛野向山A—4号墳出土土器

昭和61年度愛野向山A—2・3・4号墳発掘調査概報

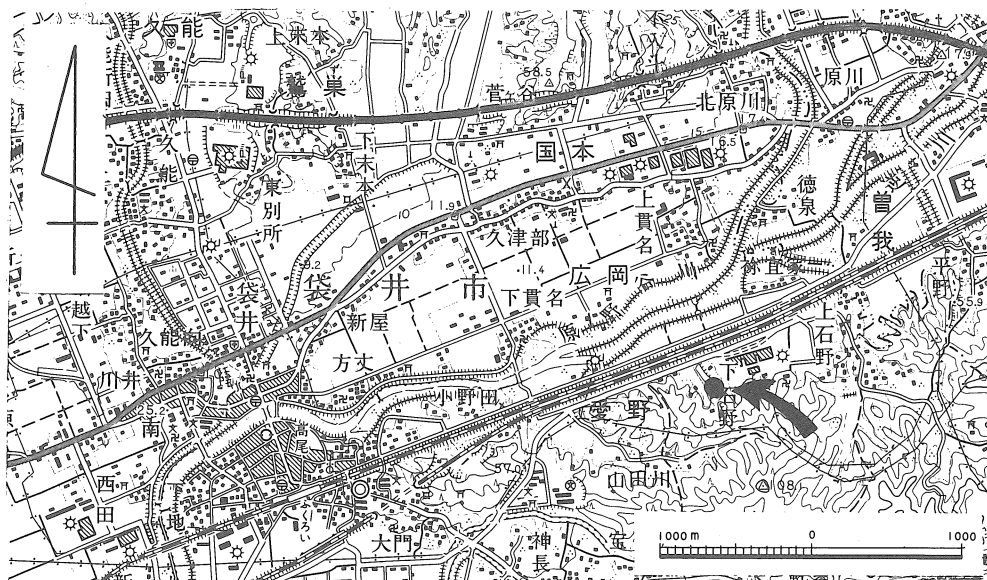
1 調査にいたる経過

昭和60年9月、袋井市教育委員会は、愛野向山A古墳群が分布する丘陵の直下に住む山崎利雄氏から古墳群の取り扱いについて相談を受けた。

山崎氏宅の裏山は高さ10数mの切り立った崖になっており、最近長雨が続く小規模な崩落が起こるようになったという。裏山の地主の承諾も得たので、早急に丘陵の勾配を修正し、安全をはかりたいとのことであった。勾配の修正に伴って、愛野向山A—2・3・4号墳を削り落とすことになるので、これら3基の古墳をどう取り扱ったらよいのか相談にみえたわけである。

袋井市教育委員会は、早速袋井市役所都市計画課と協議し、現地を確認した。都市計画課の意見は確かに危険な状態であり、安全確保のため丘陵を掘削するのやむおえないとのことであった。

袋井市教育委員会は、愛野向山A—2・3・4号を記録保存することにしたが、勾配修正前に発掘調査期間を確保できるかどうか大きな課題であった。山崎利雄氏、地主、静岡県教育委員会文化課、諸関係機関と協議を重ね、1)古墳に影響を及ぼさない範囲で、緊急に当面必要な安全対策を実施する。2)昭和61年度、国・県の補助金を得て発掘調査を実施し、梅雨時期までに記録保存を完了させることにした。



第1図 愛野向山A—2・3・4号墳位置図

2 発掘調査の方法・経過・調査整理体制

i) 発掘調査の方法

オフセット方式により地形（墳丘現状）測量図を作成した。丘陵頂部・斜面に幅1mのトレンチを任意に設定し、古墳の残存状態等を確認後、必要な範囲を平面発掘調査した。

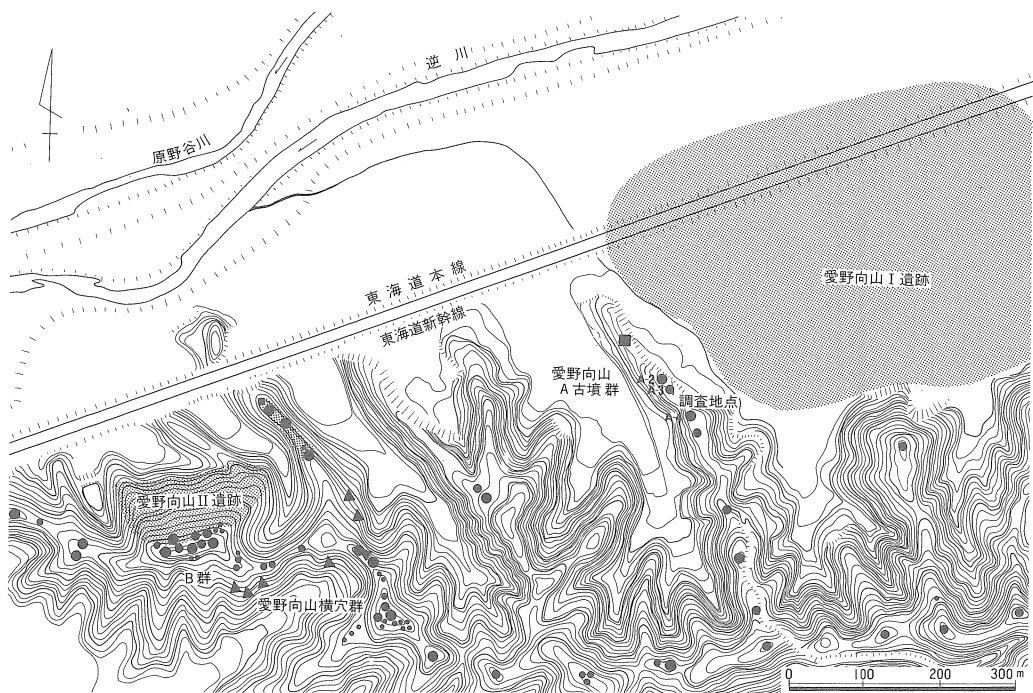
丘陵頂部のトレンチの西縁を基準として、調査区全面を1辺10mの方形グリッドに区画した。4隅のポイントは図面作成のための基準点である。

図面は地形測量図が100分の1縮尺、その他は20分の1縮尺を原則とし、必要に応じ10分の1縮尺図を作成した。写真撮影にはブローニーサイズ原画（白黒）と35mmサイズ原画（白黒・カラーリバーサル）を併用した。

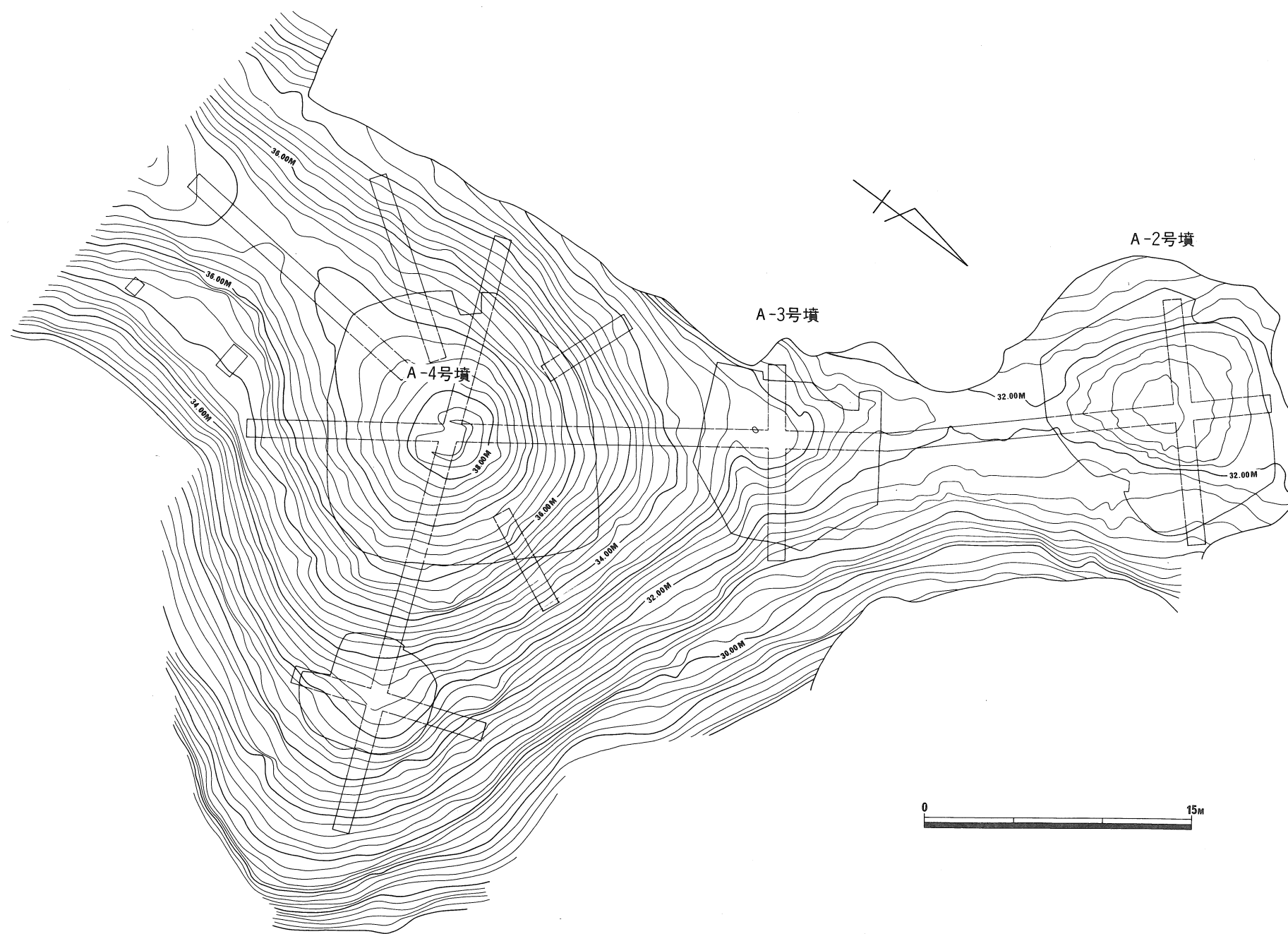
ii) 経 過

昭和61年4月21日～30日 現場事務所用テント設置。水準点を移動し、地形測量を行った。並行してトレンチの発掘を行い、A—2・3・4号墳の残存状態をほぼ確認した。東方に張り出す支陵の頂部にも古墳状の盛り上がりが認められたため、十字にトレンチを設定し、調べてみることにする。A—3号墳の表土内から須恵器杯蓋・甕の破片が出土。トレンチ内に土壌状（主体部か？）の落ち込みが認められた。

5月1日～17日 A—2号墳の表土を除去し始めたところで、お茶の摘み取りの最盛期をむかえ、発掘作業員が激減。調査は遅々として進まなくなった。どうにか表土を剥ぎ、盛土を露出させた。



第2図 愛野向山A古墳群・周辺遺跡分布図



第3図 愛野向山A-2・3・4号墳地形図（墳丘図）

5月19日～31日 A—2号墳の主体部を検出、精査。盛土をすべて取り除き、完了図面を作成。

写真撮影を行った。24日から再び発掘作業員も増え、発掘調査は順調に進む。A—3・4号墳の表土を除去。周溝を完掘。A—4号墳の周溝底部に土壙状の落ち込みが数ヶ所認められ、盛土の張り出し部分（東側）からは土師器（甕1点 杯身3点）が一括出土した。

6月2日～14日 A—3号墳の主体部を完掘し、図面作成。写真撮影。盛土の下に焼土が認められた。東方に張り出す支陵頂部を精査。須恵器杯蓋片が出土したが、遺構は明確でない。丘陵東斜面にある平坦部の遺構の有無を1辺2mのグリッドにより調査。A—4号墳の主体部を完掘し、写真撮影。図面作成。盛土を切断して、14日現地作業のすべてを終了した。

iii) 調査整理体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

調査実施機関 袋井市教育委員会 教育長 鈴木勲一

社会教育課長 井口育夫

文化振興係長 小粥保夫

学芸員 吉岡伸夫（発掘担当者） 永井義博 松井一明

現地発掘調査 調査補助員 早川保子 戸塚和美

発掘作業員 山本はつ江 山下悦子 高橋巳代子 寺田松枝 高橋さか江

安間しげ子 永田のお枝 栗田みね子 寺田矩江 太田みか

仲根わか 名倉保子 金原いと 寺田妙子 松浦せい子 伊藤
みさ

資料整理 早川保子 寺田矩江 松江知子

3 立 地

愛野向山A古墳群は、小笠山丘陵の北麓に広がる入り組んだ小支陵（標高30～65m）の頂部に位置している。愛野向山B古墳群とあわせ総数60余基からなる大群集墳である。また愛野向山B古墳群が立地する丘陵の南斜面には、後続すると思われる愛野向山横穴群（総数20数基）が形成されている。

西方約1kmで西流する原野谷川・逆川が合流し、水利に恵まれているが、河川南岸の自然堤防は未発達であり、今のところは付近に顕著な古墳時代の集落跡は確認されていない。愛野向山B古墳群と重複する愛野向山Ⅱ遺跡（弥生時代後期 古墳時代前期中心）、愛野向山B古墳群直下の沖積低地に成立した愛野向山Ⅰ遺跡も採集品で見るとかぎり弥生時代後期の集落遺跡である。もっとも近い古墳時代後期の遺跡は、北東約2km離れた坂尻・原川遺跡等や南東約2.5kmの河岸段丘上に分布する大門遺跡群ということになる。丘陵の北麓という中遠地方では特異な立地を示す愛野向山A・B古墳群とこうした大奥津城を成立させた集落（集団）群の問題は、袋井市域の古代史を考えるうえで大きな課題である。

* 報告書近刊の予定

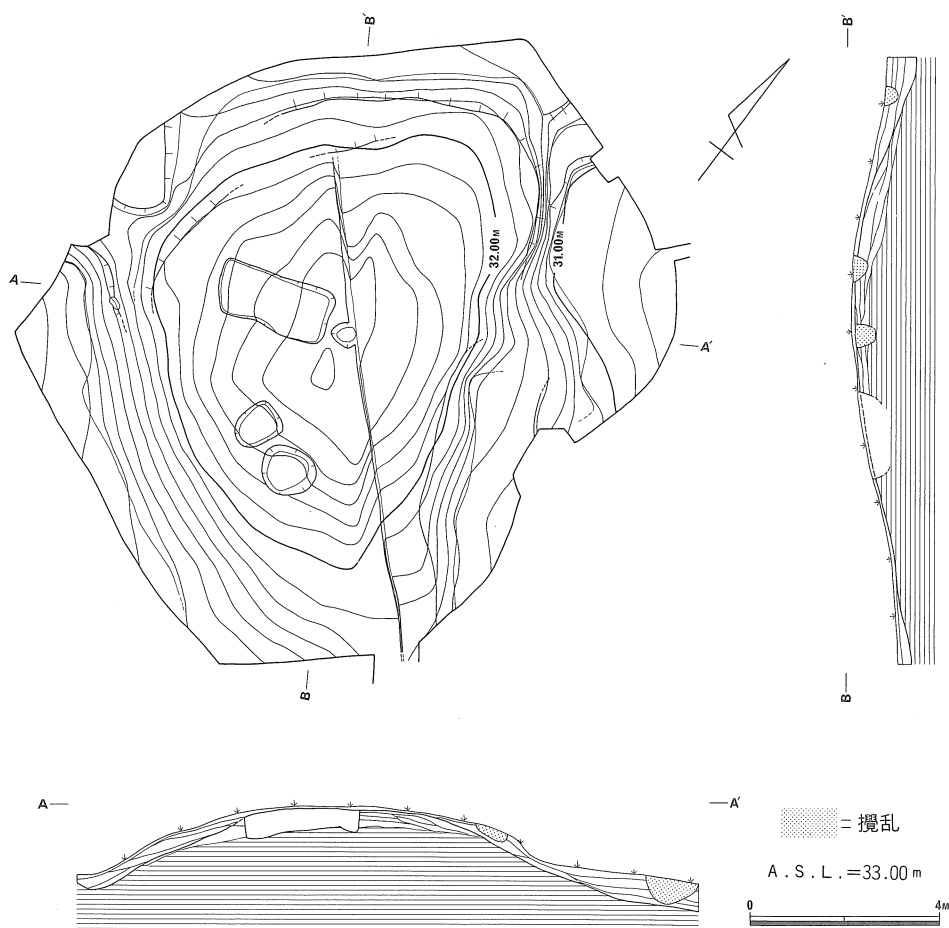
4 愛野向山A—2号墳

i) 外部施設

方墳(?) 墳丘規模 東西9.5m×南北10.0m×高さ(2.0)m 墳丘方位 N—45° 30'—W
北側および西側の裾部は若干膨らみをもちながら直線状に伸び、方墳と考えるのが妥当なように思われる。

盛土は墳頂部で厚さ約45cm残っていた。遺跡基盤層(小笠山礫層)を構成する1)小礫混じり黄褐色土、2)黄色砂と、3)暗褐色泥土が互層(1層の厚さ5~10cm)を形成し、レンズ状をなす1層の土量は、平均、発掘に使用した竹箕1~2杯分である。墳丘中央では同一土層がかなり広範囲におよんでいた。まず中央付近に土を盛り、ある程度高さを確保したところで順次外周を整えていったと考えているが、攪乱された所も多く、盛土の構築順序は断定できない。

盛土下の遺跡基盤層上面は比較的平坦で、古墳築造に際し、丘陵頂部を整形した可能性がある。



第4図 愛野向山A—2号墳実測図

尾根上に横断する溝を掘り、丘陵斜面を削り込んで周溝としていた。北東・北西隅では周溝底が浅くなり、土橋状をなしていた。遺跡基盤層を深くまで掘り込み、その排土を盛土に転用したのであろう。周溝内（特に丘陵斜面において）には黒色有機質土が堆積していた。

ii) 内部施設

木棺直葬 長さ2.45m×幅1.20m×深さ(0.45)m 主軸方位 N—59° 00′—E

表土直下で確認でき、遺跡基盤層を約15cm掘り込んでいた。東半の壁の傾斜は緩やかであり、底面は皿状をなして西方に向いわずかに傾いていた。棺材の痕跡は明瞭ではなかったが、一応木棺直葬と判断した。

古墳築造時に丘陵の頂部を整形した可能性を考慮すれば、木棺は盛土以前にすえられていたとも考えられる。

他に盛土上から掘り込まれた土壌状の落ち込みが2ヶ所確認された。

iii) 遺物

主体部内から、肩部に退化した稜を持ち、身受け部の長い(2cm強)須恵器杯蓋小片が1点出土している。周溝の覆土(黒色有機質土)中に、土師器壺口縁部片 平安時代に属する須恵器有台盤(第8図—8) 灰釉陶器碗片が数点含まれていた。

愛野向山A—2号墳とA—3号墳はよく似ており、築造時期は両古墳とも近時(6世紀前葉)と考えている。

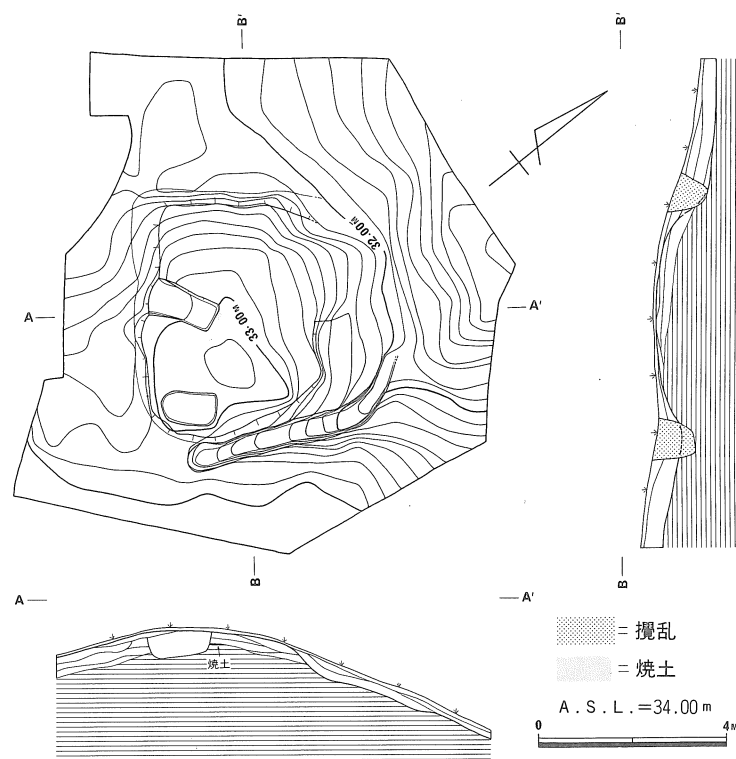
5 愛野向山 A—3号墳

i) 外部施設

方墳(?) 墳丘規模 東西(4.5)m×南北(5.0)m×高さ(1.3)m 墳丘方位 N—57° 00′—W

西側の盛土は流出していたが、北側および東側の裾部は直線状をなす。南側を走る周溝状の落ち込みは雨水の流路(攪乱)と考えている。

A—2号墳と同様の3種の土壌により盛土を築いていた。



第5図 愛野向山A—3号墳実側図

尾根を横断する南側の周溝は明瞭でなく、北側においてもわずかに凹む程度である。丘陵東側の斜面には顕著な削り込みが認められた。

盛土を除去すると平坦な遺跡基盤層が現れる。遺跡基盤層に密着して、一部北側の主体部と重複する焼土（長径40cm 短径20cm 厚さ数cm）が確認された。精査したものの焼土周辺に柱穴状の落ち込みは認められず、地形的にも竪穴住居等の炉とは考えにくい。盛土に際し平坦に整形された可能性がある遺跡基盤層に密着している点、愛野向山A—3号墳の築造に関わる焼土と判断するのが妥当なように思われる。

ii) 内部施設

木棺直葬（2ヶ所）

北側主体部 長さ（1.50）m×幅0.80m×深さ（0.55）m 主軸方位 N—62° 00′—E

南側主体部 長さ1.20m×幅0.70m×深さ（0.40）m 主軸方位 N—43° 00′—E

表土を除去したところ、墳丘の西寄りに2ヶ所主体部が確認できた。

北側主体部は遺跡基盤層を約25cm掘り込み、西端が失われていた。底面には凹凸が見られ、西方に向いわずに傾斜していた。

南側主体部は遺跡基盤層を約15cm掘り込み、平面楕円形様をなす。両主体部とも愛野向山A—2号墳と同様、盛土以前に棺をすえていた可能性がある。

iii) 遺物

北側主体部西半の表土および覆土上層から、遠考研編年（山村他1966）Ⅲ期中葉に属する杯蓋（第8図—1）と口縁部に沈線を併用し強調された凸帯・2条の波状文を有する甕片（第8図—2）が一括出土している。

南側主体部に伴う遺物は皆無である。他に表土・盛土中から若干の灰釉陶器・土師器・弥生土器の極小片が出土した。

築造時期は第8図—1の杯蓋をもって、6世紀前葉と考えている。

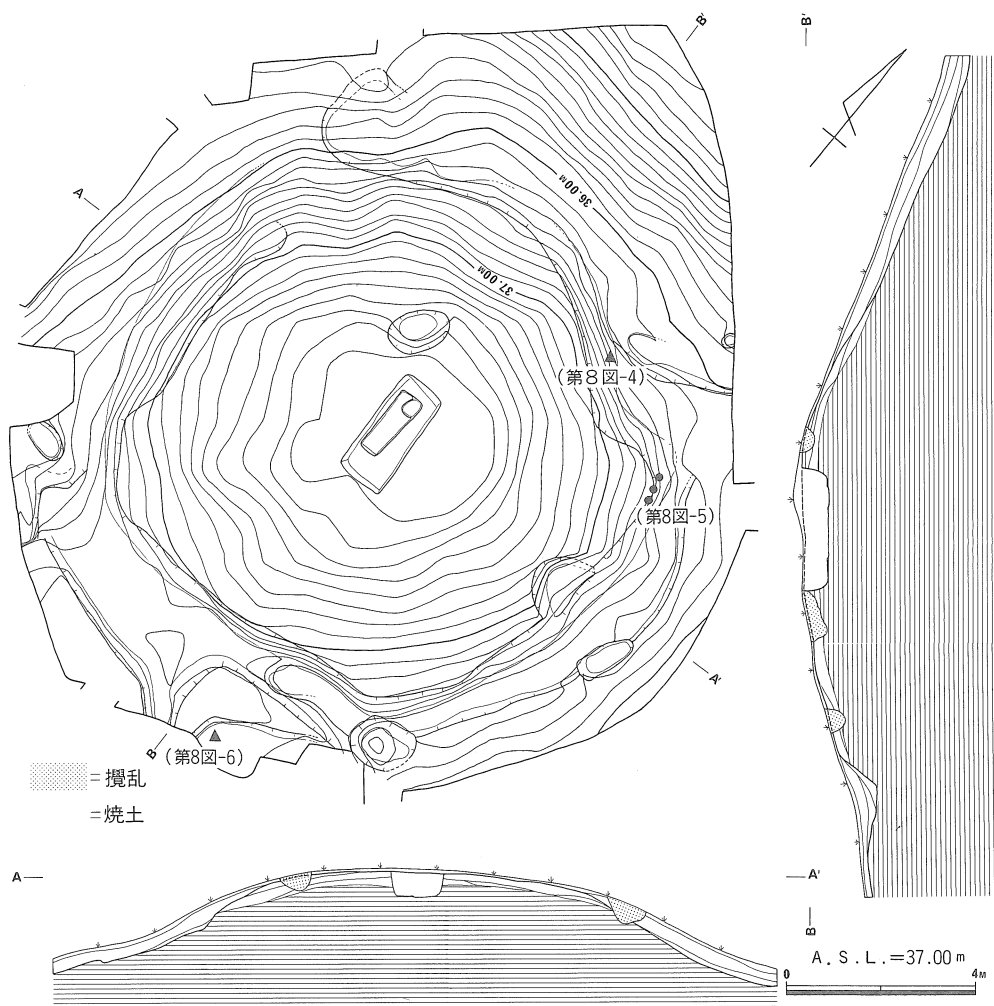
6 愛野向山A—4号墳

i) 外部施設

方墳 墳丘規模 東西11.5m×南北11.0m×高さ（2.0）m 墳丘方位 N—4° 00′—W
丘陵頂部の自然の盛り上がりを利用し、墳丘を築いていた。北・東側の裾線は弧状をなすが、他の2辺は直線的に伸びている。掘り下げ前に作成した地形図（墳丘図）の等高線は方形を呈しており、方墳と判断して、ほぼ間違いないと思われる。

墳丘中央で厚さ約40cmの盛土を有していた。愛野向山A—2・3号墳と同様の3種の土壌を積み重ねていたが、1層の土量は多く、各単一層が墳頂から周縁にかけて、約一に（厚さ数cm）広がっていた。西寄りの盛土上（表土直下）に、焼土（長径40・45cm 短径25・30cm 厚さ数cm）が2ヶ所認められた。

自然の盛り上がりの斜面を幅広く削り、4辺の墳丘裾を造り出していた。北半の周溝外側の立ち上がりは明瞭でなく、徐々に丘陵の自然傾斜へと移行していく。北東・北西・南西隅の周



第6図 愛野向山A—4号墳実測図

溝底は浅くなっていた。

東側の墳丘裾が一部内方へ凹み、南半の周溝内・外縁から3ヶ所、土壇状の落ち込み（長径1.00～1.40m 短径0.50～1.05m 深さ0.30～0.70m）が確認された。

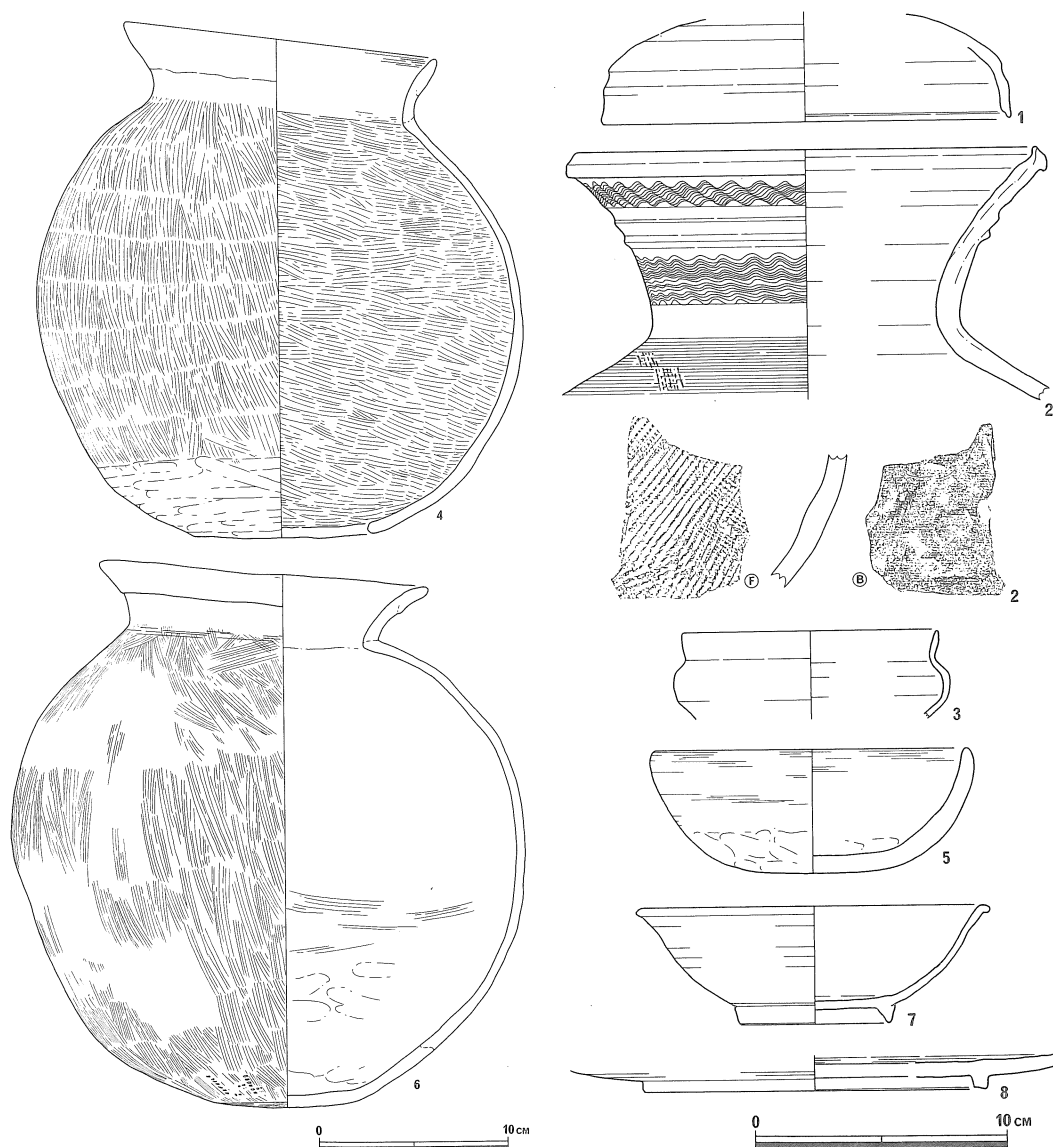
ii) 内部施設

木棺直葬 長さ2.50m×幅1.10m×深さ0.55m 主軸方位 N—15° 00'—W

墳丘中央に位置する。掘り方と木棺（長さ1.50m 幅0.55m）の輪郭が明瞭に判別でき、盛土の後、主体部を築いたことは明らかである。

木棺は掘り方の中央になく、底面に顕著な凹凸を有していた。また掘り方底面にめり込んだように、さらに一段低くなっていた。

主体部に隣接して盛土の下（遺跡基盤層上面）から確認された土壇状の落ち込みについては、次の「7 その他の遺構と遺物」で記述する。



1・2 = A—3号墳出土 3～7 = A—4号墳出土 8 = A—2号墳出土

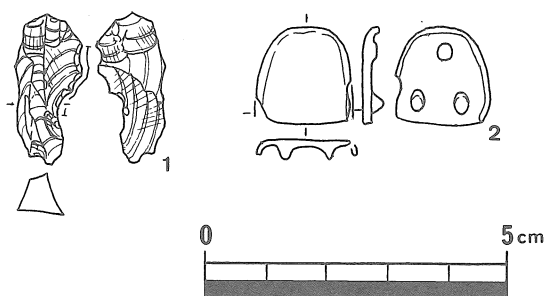
第8図 愛野向山A—2・3・4号墳出土土器実測図・拓影

iii) 遺 物

北東隅の若干浅くなった周溝の底面および削り出された墳丘裾の下端から、第8図—4・5に示した土師器甕1点・杯身3点が一括出土した。4点とも遺跡基盤層に密着しており、杯身3点は口縁部を上にし、約25cm間隔で並んでいた。甕も焼成後穿孔したと思われる底部を若干遺跡基盤層内に沈め、直立していた。すえられた当初の姿を残していると考えている。

第8図—6の土師器甕は南側の周溝外縁から出土したものである。第8図—4と同様、底部を遺跡基盤層に密着させ、土圧で押しつぶされた状態を呈していた。

主体部直上の表土内から用途不明の銅製品（第9図—2）と鉄片が、また墳頂部付近の表土・盛土・墳丘の東斜面から10数基の一石五輪塔須恵器短頸壺（第8図—3） 口縁端部を凹曲させない杯蓋片 灰釉陶器碗（第8図—7） 弥生土器片（第10図）が出土している。



第9図 剥片・金属製品実測図

2点の土師器甕のうち、第8図—4は体部下端（外面）をヨコナデし、第8図—6では籠目を残しているが、プロポーションから見て、その編年的位置（6世紀前葉）は近時すると思われる。3点の杯身（平底気味だが肉厚 口縁部内彎）もほぼ同時期に属するものであろう。

愛野向山A—4号墳の築造時期は6世紀前葉に求められる。

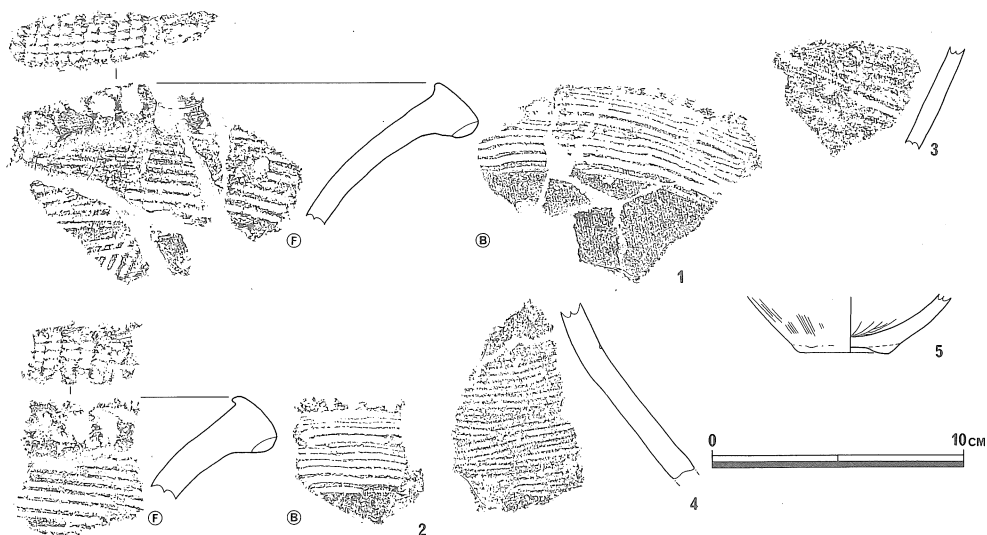
7 その他の遺構と遺物

i) 遺 構

愛野向山A—4号墳の主体部に隣接し、古墳築造以前に掘り込まれた土壌状の落ち込み（長径1.35m 短径0.85m 深さ0.25m）が1ヶ所確認された。

他に東へ伸びる支陵の頂部からも、土師器杯身小片を伴う土壌状の落ち込み（平面楕円形様）が1ヶ所見つかっている。

ii) 遺 物



第10図 愛野向山A—4号墳出土弥生土器拓影・実測図

第10図に示した弥生土器片は、すべて愛野向山A-4号墳の東半の盛土中に含まれていたものである。

第10図-1～4は同一個体と思われ、黄褐色を呈する。口唇部に連続した刺突を施し、口縁部内面に2条の櫛描き文を加える。肩部(第10図-4)にも重複する櫛描き文が見られる。おそらく壺形棺として使用された水神平Ⅱ式土器(紅村1978)であろう。古墳築造に際し、破壊されたものと考えている。

上げ底様をなす第10図-5は、弥生時代中期後半の細頸壺の底部片かもしれない。

黒耀石製の剥片が数点出土している。内1点(第9図-1)は、側縁に使用痕を残す削器である。

8 まとめにかえて

愛野向山A-2・3・4号墳の発掘調査結果を整理すれば、第1表のとおりである。

今回の発掘調査は、60余基からなる群集墳のなかで、わずかに3基を対象としたものであったが、その調査結果には、今まで中遠地方の後期群集墳資料に欠けていたいくつかの検討材料が含まれていたように思う。

以下列記し、まとめにかえたい。

第1には、中遠地方に方墳からなる(方墳を主体とする)群集墳が存在する可能性を高めたことである。

第1表 愛野向山A-2・3・4号墳一覧表

名 称	墳 形	墳 丘 規 模 (東西幅×南北幅×高さ) m	墳丘方位	基盤層 の削平	盛土	周溝	主体部	主体部方位	遺 物	時 期
愛野向山 A-2号墳	方墳(?)	9.5×10.0×(2.0) m	N-45°30'-W	有	有	溝・削り	木棺直葬	N-59°00'-E	須恵器杯蓋・有台盤 土師器壺 灰釉陶器碗	6世紀前葉(?)
A-3号墳	方墳(?)	(4.5)×(5.0)×(1.3) m	N-57°00'-W	有(焼土)	有	溝・削り	木棺直葬 (2ヶ所)	N-62°00'-E N-43°00'-E	須恵器杯蓋・甕 土師 器 弥生土器 灰釉陶器	6世紀前葉
A-4号墳	方 墳	11.5×11.0×(2.0) m	N-4°00'-W	不明	有	溝・削り	木棺直葬	N-15°00'-W	須恵器杯蓋・短頸壺 土師 器杯身・甕 弥生土器 灰釉 陶器碗 鉄片 銅製品 一石五輪塔	6世紀前葉

西方の丘陵に分布する愛野向山B古墳群の構成・内容については、同僚の松井一明が身を粉にして行った発掘調査により、その大要が明らかになりつつある。愛野向山B古墳群においても木棺直葬を内部施設とする方墳が主体をなし、その形成は5世代に始まっている。6世紀前半に最盛期をむかえた後、高塚墳の築造は急速に衰退していくという。

愛野向山A-2・3・4号墳の築造時期は愛野向山B古墳群の最盛期と重なる。両古墳群の形成は、横穴式石室墳からなるいわゆる後期群集墳に比べ、1世紀近くも遡るものと推定され、こうした初期群集墳とも呼ぶべき古墳群の存在を念頭に置きながら、中・後期群集墳を再度、検討し直してみる必要があると思う。

中遠地方の初期群集墳の分布域にあっては、小古墳が爆発的に増加する7世紀初頭にいたる

と、群集墳と同じ丘陵斜面に横穴群が盛んに営まれるようになる（例えば地藏ヶ谷古墳群と横穴群 金山古墳群と横穴群等）

第2は規模・形態の問題である。

愛野向山A—2・3・4号墳の規模・形態は、一見弥生時代の方形周溝墓と何ら変わるところがない。方形周溝墓群に比べ分布が散在的であり、舌状丘陵の頂部という立地が異なる程度である。木棺直葬を用いたり、総じて副葬品が貧弱な点もよく似ている。

あるいはこうしたところに、初期群集墳を知る手がかりが隠されているのかもしれない。

第3は古墳築造に係る祭祀についてである。

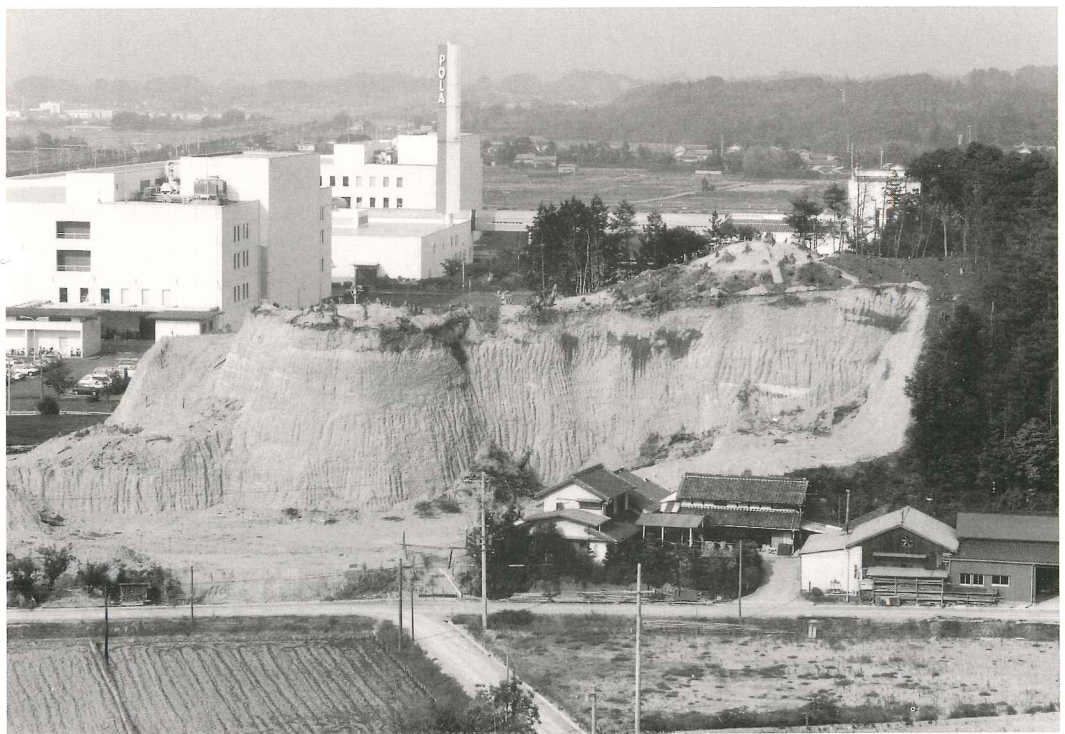
愛野向山A—2・3号墳では、古墳の築造に際し、まず丘陵頂部を平坦に整形していた。土を盛りやすくし、墳形を整える目的があったと思われるが、愛野向山A—3号墳においては、整形した面に焼土が残っていた。丘陵頂部を削平した後、そこで何らかの送葬儀礼が行われた可能性も、あながち否定できないように思う。

参 考 文 献

- 山村 宏他 1966 「大沢・川尻古窯跡調査報告書」『遠江考古学研究会学報』第3集 遠江考古学研究会
- 紅村 弘 1978 「3 水神平式土器の諸問題」『東海先史文化の諸段階（資料編Ⅱ）』



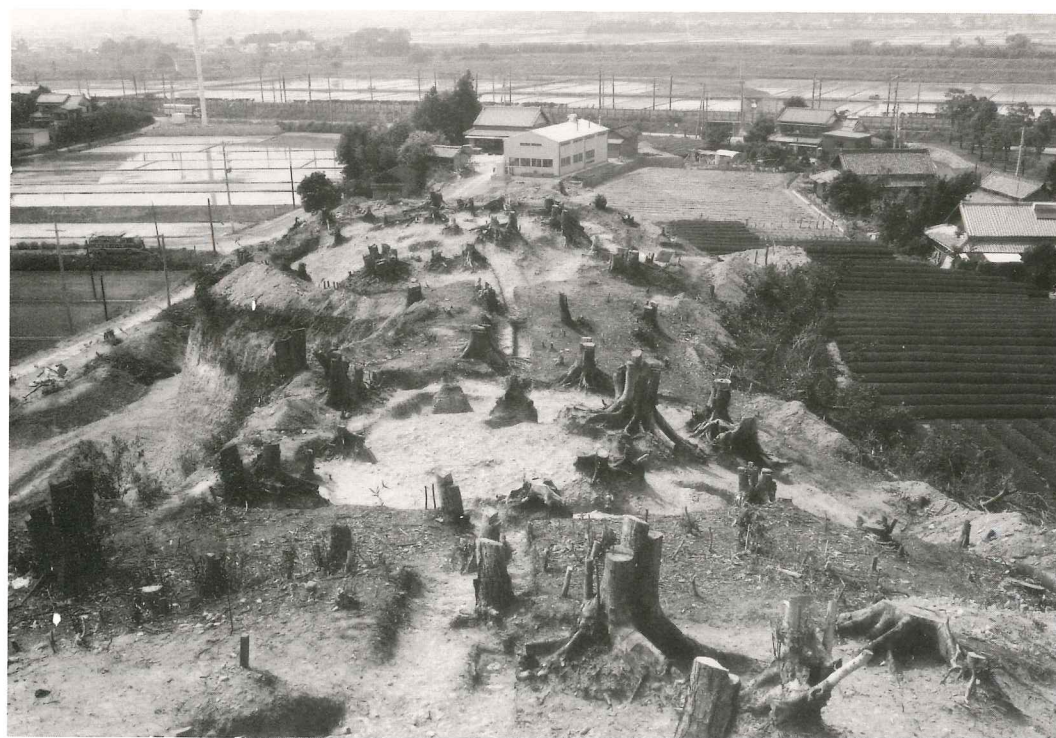
愛野向山A-2・3・4号墳遠景—航空写真—（北西から 松井一明撮影）



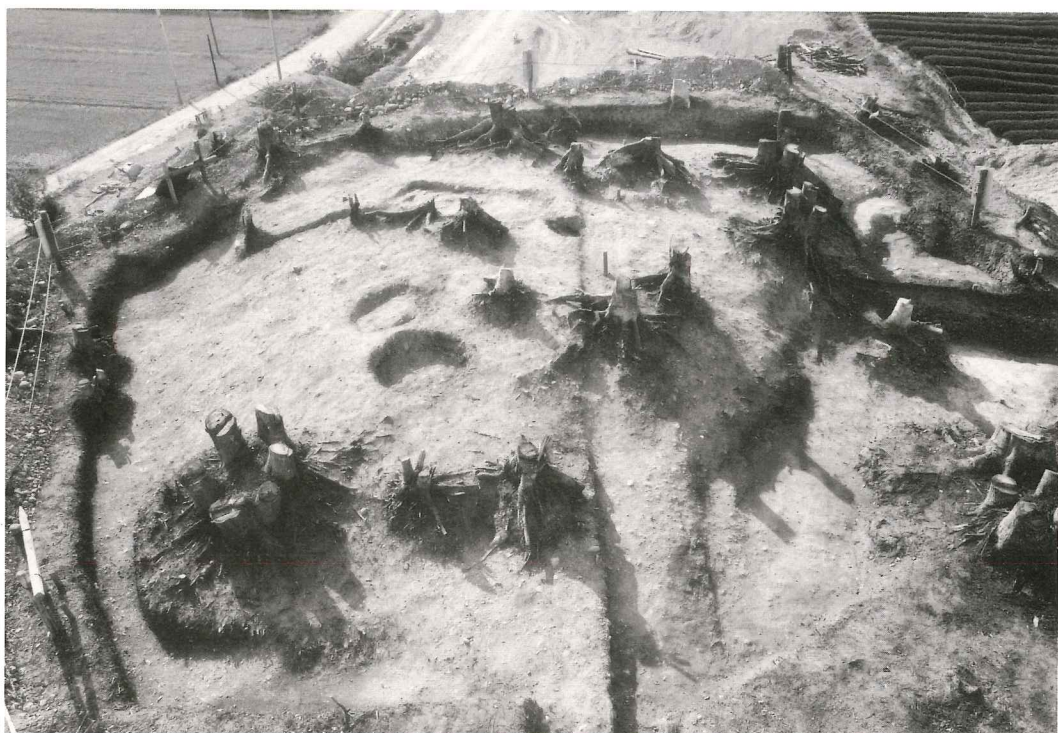
愛野向山A-2・3・4号墳遠景（西から）



愛野向山A-4号墳発掘調査前近景（北西から）



愛野向山A-2・3号墳近景（南東から）



愛野向山 A-2号墳完掘全景（南東から）



愛野向山 A-3号墳完掘全景（南東から）



愛野向山A-4号墳完掘全景（南から）



愛野向山A-4号墳東側周溝（南から）

図版 5



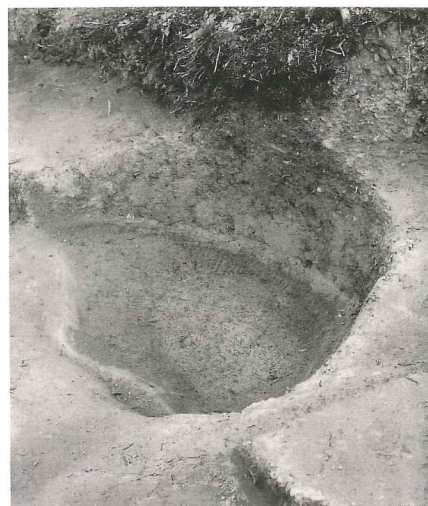
(左)
愛野向山A-2号墳主体部
(西から)

(右)
愛野向山A-3号墳南側主
体部
(南西から)



(左)
愛野向山A-4号墳周溝内
土壇状遺構 (北から)

(右)
愛野向山A-3号墳北側主
体部
(南から)



(左)
愛野向山A-4号墳主体部
(北から)

(右)
愛野向山A-4号墳周溝内
土壇状遺構 (西から)



(左)
愛野向山A-3号墳焼土
(南から)

(右)
愛野向山A-4号墳主体部
—完掘状態— (北から)



愛野向山 A-4号墳土器
(第8図-4)出土状態
(東から)



(左)
愛野向山 A-4号墳土器
(第8図-5)出土状態
(北から)

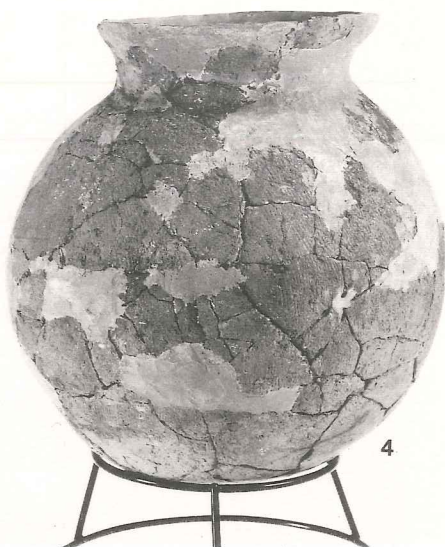
(右)
愛野向山 A-4号墳土器
(第8図-6)出土状態
(北から)



発掘調査風景



5



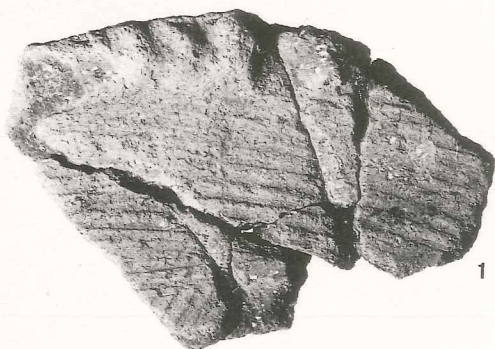
4



6



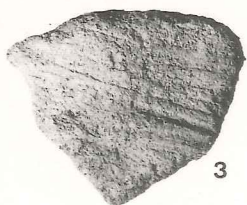
4



1



2



3



4

愛野向山 A—2・3・4 号墳

—昭和61年度緊急発掘調査概報—

1987年3月31日

発 行 静岡県袋井市教育委員会

〒437 袋井市国本 3070-1

印 刷 株式会社 開 明 堂

〒430 浜松市中沢町 1-1